

一游会90周年を祝して

千代田区立九段中等教育学校長

牧野 敦

一游会創設90周年を心よりお祝い申し上げます。

今年度九段中等教育学校長を拝命いたしました牧野と申します。ここ九段には副校長としてお世話になっており、7年ぶりに校長として戻ってまいりました。一游会の90周年と令和の幕開けの年に再び九段にお世話になることに並々ならぬ御縁を感じる次第です。

着任に当たり、始業式において「至大至剛」の話をしました。「至大至剛」は本校の校是である。校是とはその学校の根本精神を指し、教育目標とは異なる。精神なので実体は伴っていないが、九段の同窓生の心には、何よりも確かなものとして存在している。先輩方は人生の苦境にさらされたときは至大至剛の精神で立ち向かい、人生の岐路に立ったときは至大至剛の精神に問いかけ、決断してきた。九段生にとって至大至剛とは、艱難にあったときに行く手を照らしてくれる支えとなっている。しかし、誰に対しても慈愛を発揮してくれるわけではなく、九段において己を十分鍛え上げたものにしかこの精神的支柱が据えられることはない。あ

なたがたは本校に入学してこれまで、この精神と向き合ってきたか。」

この言葉が真に生徒の心に響くのは、至大荘行事を経験したときになるでしょう。至大荘において、游泳助手である「先輩」達が共に泳ぎ、共に涙する姿を見たときになるでしょう。近年の至大荘では、游泳助手は多種の部活動卒業生が務めてくれていますが、軸になるのは一游会の先輩達で、特に社会人となっても至大荘のために全力を尽くしてください。その姿に、生徒は大きな感銘を受けると思います。

長きにわたって至大荘を支えてくださっている一游会の皆様に厚く御礼申し上げますとともに、90周年をお慶び申し上げます。今後とも次の100年、その先と、九段中等とともに歩んでくださることを、改めてお願いいたします。



河童の便り

さらば青春の海、幻の町

森 彰英(26回生)

平成最後の夏となった昨年八月、僕は一人で外房の海岸線を歩いた。例年のように至大荘では菊友会の行事が行われ、それと連動する一游会有志の観海亭に泊まる会に誘いを受けていたが、なぜか一人で海を眺めたくなったのである。

その行事の一週間ほど前に僕は東京駅から外房線の特急に乗った。まだ夏休みの期間だというのに一車両に10人足らずの乗客しかいなかった。避暑地に向かう華やいた気分など皆無で移動はもっぱら車利用で鉄道離れの現実を思い知らされた。

上総興津駅で下車したのは昼下がりである。改札口を出て目の前の町並みを見て驚いた。人影がほとんど見えないのである。しかし町の佇まいはこの数十年来ほとんど変わっていない。中華食堂、そば屋、すし屋、魚屋、雑貨店、理髪店など、僕の頭の中に刷り込まれた地図と全く同じだが、本当に営業しているのか、もしかすると幻ではないかなど、私はシュールな気分になっていた。

この町との付き合いは六十年余りになる。いま至大荘の

訓練に参加する生徒はバスを利用するが僕たちの頃はもっぱら鉄道利用だった。この駅に列車が到着した時が至大荘行事のオープニングで、ちょうどその頃は町も最盛期だった。列車が到着する度に駅前の通りは人が群れ、海に向かう前に食事や買い物する客で店は活気づいた。生徒たちが帰る時には駅前で送別のセレモニーが行われた。ホームに入った生徒たちを助手たちが柵越しに見送り、旗を振り至大荘歌を歌った。



時代が昭和から平成に移り変わった前後の十数年間、僕は毎夏の一時期を興津の町の住人になった。至大莊訓練が行われている時期に合わせて守谷の海の近くで過ごそうとしたのだが、あの界隈の民宿では一人客は敬遠されたので、興津の観光協会から紹介されたのが興津漁港の近くにある民宿だった。一夏に三、四日、二度にわたって滞在した年もあるから通算すれば結構長い時間をこの宿で過ごしたことになる。毎日夜明けに漁港付近を散歩して朝食後しばらくは家に仕事をすると言って出た手前、しばらくは部屋にいたが、すぐに我慢できなくなつて宿の自転車を借りて興津の町を走り回った。その頃から町の衰退が始まっていた。民宿に時々立ち寄る地元のタクシー運転手の話ではモーターゼーションの発達で日帰り客が増え、宿泊施設に打撃を与えたという。この家みたい地味にやっているところはいいが、リゾートハウス風に改築したところはみんな借金に苦しんでいるよと小声で言っていた。確かに昔からあった大型旅館が廃業したし、駅前に立地したリゾートマンションは浜の方から夜見ると点灯している部屋は数室で大きな影が不気味だった。

そのマンションの二階はイタリアンレストランからアジア系レストランそして居酒屋へと目まぐるしく業態転換した。僕はアジア系の頃に昼食に立ち寄った。民芸品なども販

売しているがほかに客の姿はあまり見かけず、裏で大麻でも販売しているのかと思わせる、ちょっと怪しげな店だったが、マスターと仲良くなりベトナム風炒飯などを食べているとチベットのベトナムの音楽テープを回してくれたりした。夕方ビールを飲み立ち寄ることもあったが、三年も保たずにどこかに消えた。その後の居酒屋も二年と続かずにいまだに空き店舗のままである。

至大莊訓練が始まる時間に合わせて僕は守谷海岸に自転車を走らせた。観海亭で着替えさせてもらい浜に降りて游泳訓練の近くで泳いだ。一游会の小林利浩(六三回)や吉見亜衣(六六回)が九段の体育教員だった頃である。身体が冷えるところ之すけ食堂でゆで小豆などを食べながら海を眺めた。ちょうど九段高校から千代田区立中等教育学校への転換が決まりかけていた頃で、教育関係者や父母などが訓練を見学していた。偶然に浜で会った千代田区の教育長は昔、一緒に助手を務めた市川直美(旧姓辻本・二八回)のご亭主だった。同じ東京教育大(現筑波大)の水泳部員だったそうだが、後で市川夫人に聞くと、「あの人は国文、私は体育専攻で、水泳においては私の方が段違いに速かった」そうである。浜に生徒が整列し訓練が終わりかける頃、僕は浜やでビールを買ってその光景を眺めながら一杯やり、腰古井を晩酌の楽しみに民宿へ引き上げるのだった。

そんな思い出をまさぐりながら興津の町を離れてトンネルを抜けると、列車の線路と道路が並行する地点がある。昔ここで駅に生徒を見送った助手たちは先回りして列車を待ち受けた。女生徒たちが窓からハンカチに包んでお礼の手紙と菓子類を投げる風習があったからである。



僕は守谷海岸海水浴場入口という標識のところで立ち止まった。畳岩と呼ばれる岩礁を目の前にする辺りである。その先に朱塗りの鳥居のある渡島が見える。さらに遠望すれば観海亭の建物、そこから浜に下りる坂道、さらにはその向こうの断崖などが視界に広がる。昔と少しも変わらない。海上から目印にした建物や煙突もほとんど変わわずに残っているようだ。海は穏やかで浜はパラソルの花が咲き、波打ち際は人で賑わっている。そんな風景を眺めているうちに僕はいつしか白昼夢の世界をさまよい始めていた。

至大荘に向かって浜を歩いて行くと、人の群れの中にグリーンのカップに水着姿の人物を見かけた。日焼けの度合いが周囲の人たちよりも抜きん出ている。みんな若い。よく見れば次々と仲間が現れて男女の集団になった。声が僕の耳に届く。今日の游泳訓練の状況を話しているかと思えば、今夜、観海亭での酒盛りの準備はどうか、今のうちに若い者を浜やへひと走りさせようかなと言っている者がいる。竹の切れっぱしを手にして何からしゃべっているのは打ち上げの夜に観海亭一座が上演するチャンバラ劇の筋立てを考えているのだろうか。その合間に愚にもつかぬ駄洒落を連発して笑いこけている。

そこで僕は気がついた。この男女たちは僕と一緒に観海亭で過ごし、一足先にあの世に旅立って行った人たちのな

だ。それぞれの顔や姿に見覚えがある。僕は名前と顔を一致させながら、連中の数を数えたが、たちまち十指に余った。懐かしく切ない。呼び掛けて話しかけようとしたが、あの一団は声の届かないところにいる。

そこで僕は白昼夢の世界から現実に戻った。相変わらず守谷浜を望む小高い場所に佇んだままである。時計を見ると一時間近く経過している。どうやら僕は守谷浜の風景の中に吸い寄せられ青春を取り戻すとともに先立った仲間たちを供養していたらしい。これで十分ではないか。僕は再びトンネルを抜け幻影のような町を過ぎて駅へ向かっていた。

一倉重雄（33回生）

○近況

一游会の皆さんにはご無沙汰ばかりです。

週2回の水泳、7千歩程度のウォーキング、旅行（海外と国内）など元気な日々を過ごしています。

2年前に運転免許を返納し、ゴルフは年に3〜4回程度に激減です。

過日、九段高校の同期会（後期高齢者の仲間入りを名目に）に初めて参加しました。

水泳部からは小生1名の寂しい参加でした。（2名ほど中途に退部した方がいましたが）卒業以来50数年を経た容姿に紅顔の面影を探し求めた楽しい時間でした。



赤司久雄（34回生）

○近況

5月20日早朝、青木俊行会長急逝の報に接し、只々驚くばかりでした。平成24年森彰英氏（26回生）から会長職を引き継ぎ、一游会のリーダーとして、また、菊友会理事、公益社団法人九段（尽性園・至大荘の維持管理運営）の事務局長として精力的に活動しておられた矢先でした。衷心よりご冥福をお祈りいたします。

小生は自動車運転免許証の更新に当たり、認知機能検査を受ける年になりました。（8月で75歳）ボケも少しずつ進み始めておりますが、週2回のゴルフ（年約90ラウンド）で何とか体力の維持に努めている昨今です。

○水泳部90周年について思うこと

平成21年5月31日、九段会館で約100名の会員が参集し、「さよなら九段高校、ようこそ九段中等教育学校」と銘打って一游会総会ならびに懇親会が催されました。あれから10年。90周年を迎える運びとなりご同慶の至りです。それぞれの節目に居合わせた喜びを噛みしめておりますが、併せて10年後の100周年も何とかこの目で見届きたいと思いを新たにしております。

90年間、間断なく一游会を支え続けてこられた歴代の幹事諸兄姉に心から感謝申し上げます。

前原栄子（松尾）（38回生）

○近況

古稀を迎えました。週2回のジム通いと週1回のヨガで健康維持に努めています。

○水泳部90周年について思うこと

90周年おめでとうございます。改めて伝統の重さを感じます。中高一貫校になり難しい面が多いでしょうが「至大荘」が100年まで続けられたらと願っています。

原田忠禮（40回生）

○近況

昨年春より、菊友会理事長を仰せつかり奮闘しています。伝統ある一中・九段高校・九段中等の歴史を伝承しつつ、あたらしい時代に即した、とりわけ生まれたばかりの令和

の中で、同窓会のあるべき姿を求めていきたいと思いま
す。

私自身は菊友会主催の至大莊懇親会で、一游の諸先輩と守
谷で泳ぐ以外ほとんど水とは縁のない生活となっていました。
ました。

梅本高士（40回生）

○近況

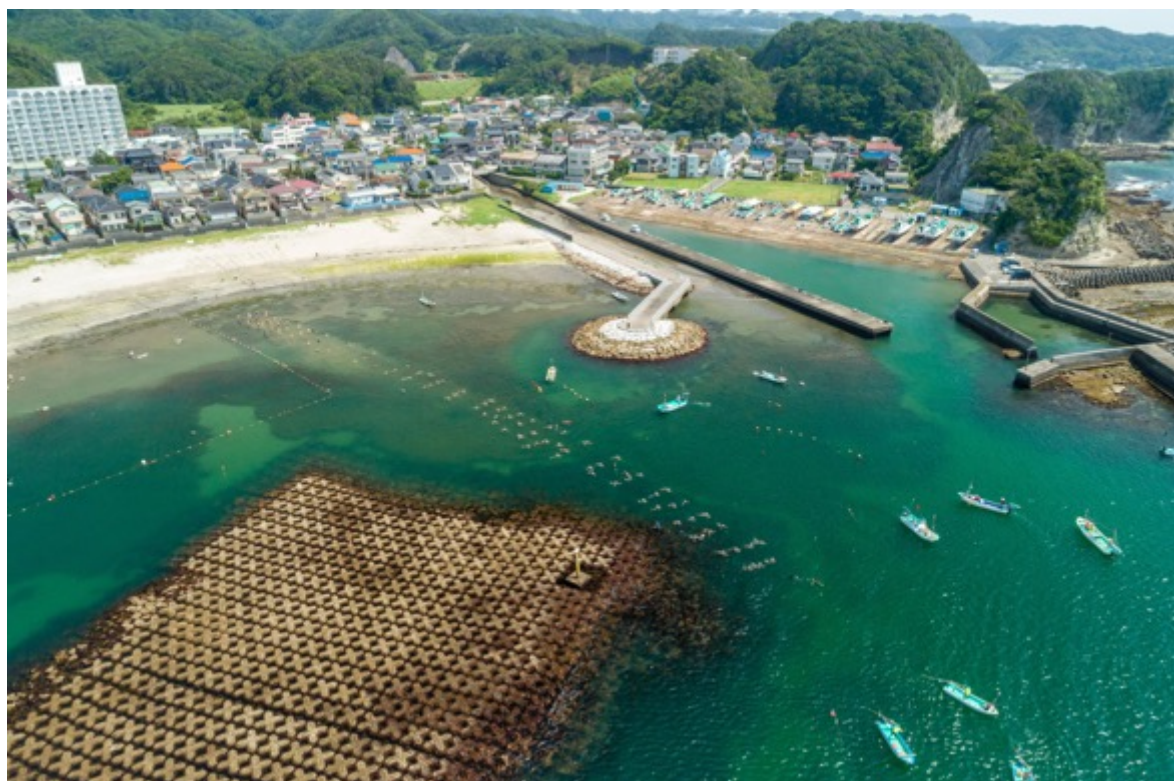
50歳前に始めた仕事が忙しくなってきたてしまいました。
老害にならぬよう、ちよつと氣を使いながら走っています。

○水泳部90周年について思うこと

諸先輩たちがつないできた「熱と意気と感激」のバトンがつ
ながって90周年にもなったこと感無量です。

続けることの大切さが良くわかるこの頃です。

これからの一游が、ずつと心のよりどころになるように
努力して、これからもつないでいきましょう。



高木昭美 たかぎ あきよし（43回生・高校24回）

○近況

5月2日の第27回東京辰巳水泳大会に一游会の一人として男子50mBr（60代）に出場し、43.59秒（反応タイム0.63秒）でした。都水協の大会役員も3年目。現役諸君の力泳をまじかに見て密かに声援を送っています。芝浦工大講師は6年目です。

○水泳部90周年について思うこと

大正、昭和、平成、令和と90年続いていることのような恩恵に感謝したいです。今も現役水泳部が存在していることも必ずしも当たり前ではないと思うのでうれしいですね。

佐藤 昌昭（45回生）

○近況

64歳になりました。心臓の手術から5年、5キロ体重が増え、スーツのズボンが一本を除いてはけなくなりました。でも、今年もゆっくりでも泳いで行こう、と思っています。60代以上の皆さん、体をいたわりつつ楽しい時間を！

○水泳部90周年について思うこと

90周年、おめでとうございます。至大荘や「一游」というこの冊子があったから、ここまで続けてきたのかな、と思うところもあります。いろいろ無理もあるのだろうけど、関わってきた全ての人の力ですね。でも会費は学生1000円、20代2000円、30代3000円ぐらいに値下げして、倍の人数ぐらいから集められると良いと思いますが・・・。役員の皆様ありがとうございます。

山口晃平（63回生）

○近況

東京作業所に配属になり、2年目です。

夜勤現場が多く、昼夜関係なく働かされています。

なるべく仕事帰りにはフィットネスクラブに足をはこぶようにして、オープンウォーターなどの大会にも出るようにしています。

○水泳部90周年について思うこと

一游会幹部をやらせていただいているので、先輩から後輩まで、なるべく面識を深めていきたいです。気軽に声をかけてください！

吉見 亜衣(吉田) (66回生)

○近況

都立武蔵高校に異動し、2年目に入りました。

法人九段、菊友会を始めとするたくさんの方の先輩方や自身がお世話になった先生方、互いの青春時代を知る同世代、毎年入学してくる後輩たちと、日々関わりを持ちながら過ごすことができたのは、母校に勤める醍醐味であり、至福の時でした。私を育ててくれた九段への感謝の気持ちがこの職業を目指したきっかけであるという初心を忘れず、どこへ行っても頑張ります。



中村萌（78回生）

○近況

2019年は、Hawaiiでイルカと泳ぐという長年の夢を実現☆

スキューバダイビングから、スキندайビングやドルフィンスイムに移行しつつある。。。やっぱり泳ぐのが好きでした♪

夏から沖縄県に移住転勤！

5年前からいつかいつかと考え始め、2019年実現☆元号も変わり、今年は良い流れがきています♪

○水泳部90周年について思うこと

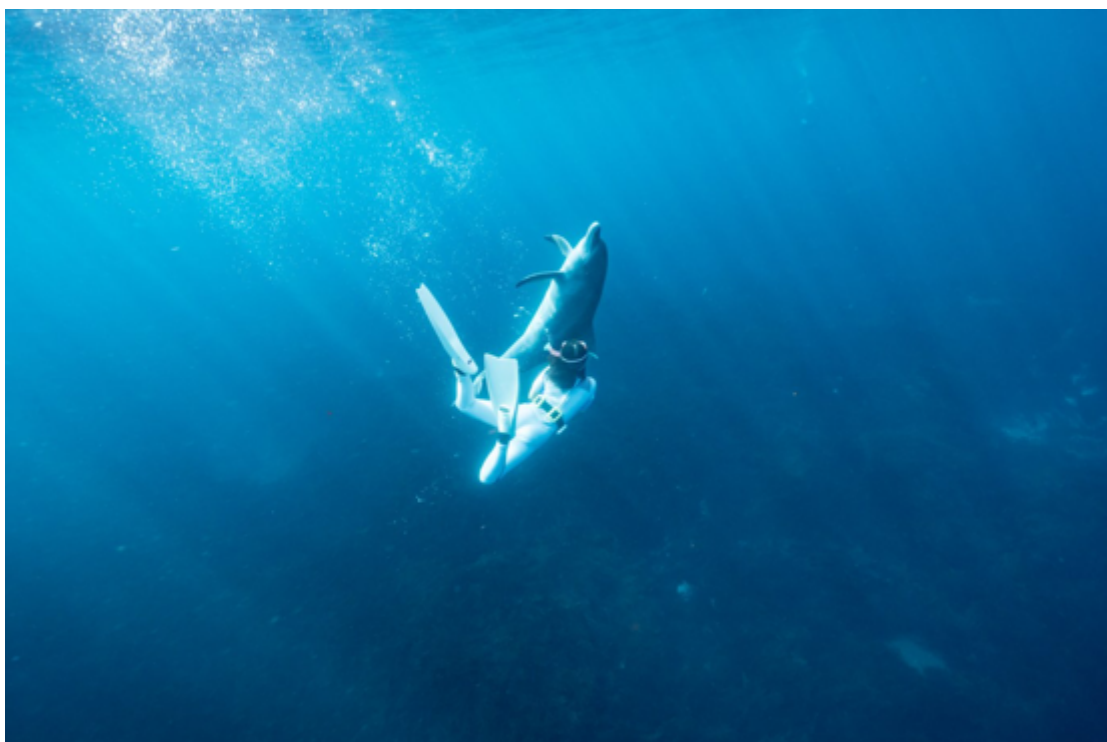
大好きだった水泳部。

活動日が多かったけど、それだけ濃かった3年間。

先輩方が繋いでくださり、後輩達が繋いでくれている。

卒業してから全然関わっていないのは申し訳ございません。

関わる全ての人に感謝しつつ、100周年を楽しみにしています！



●一游会会長 青木さんを偲ぶ●

令和元年5月20日 午前7時15分に 一游会会長 青木俊行さん（享年63歳）がご逝去されました。

そこで今号では青木会長を偲んで皆様からお寄せいただいた追悼文をご紹介します。



青木さん、ありがとう。

森 彰英（前一游会会長・26回）

あれは東日本大震災の年、2011年夏だった。恒例の至大莊行事で青木俊行さんに会った。その頃、私たちは一游会の会長の引き受け手を探して困っていた。森が会長、津村徹（30回）が副会長という体制が8年余り続き、次の世代へのバトンタッチを迫られていたが、なかなか決まらずに焦っていた。青木さんとはその時が初対面だったが、何となく前向きな姿勢を感じて、後で手紙を出して懇請したところ快諾を得た。それからの活躍はご承知の通りだ。至大莊の助手派遣が低調だと知ると、自ら観海亭に泊まり込み、一游会の存在価値を知らしめた。前後のOBに働きかけて一游会活動の新体制を作ったし、法人九段では学校と協業して臨海施設などの画期的なバックアップ体制を構築し今後は学校と社会人が協力し合って新しいスポーツやリクリエーションの展開というところまで視野に入れていたらしい。

私は毎年5月の連休前に開催される青梅の武市一良（28回）宅のバーベキューの会で青木さんと会った。一昨年だったか同伴して出席され料理の世話をしてくれている奥様に、仕事で多忙な身をさらに忙しくさせて申し訳ありませんと謝ったところ、新しい生きがいが見つかって喜んでいきますとの答えが返ってきた。そして今年も4月21日に会

った。一行の中では最年少であった。それかに約1ヵ月後の訃報である。信じられない。「法人九段のオフィスは尽性園の中にあります。一緒に近くの多摩川べりでも歩いて語り合いました」と言われていたのだが、それが果たせなくて残念だ。謹んでご冥福を祈ります。



「青木さんへの追悼文」

赤司久雄（34回生）

5月20日朝、原田忠礼さん（40回生、菊友会理事長）から「青木君が今朝亡くなりました」と電話連絡を受け、我が耳を疑い、俄かには信じられませんでした。そう言えば前々日の5月18日、菊友会評議員会が開催され、青木さんは新理事に就任し紹介される筈だったのに姿が見えなかったのでしょうかと思いましたが…。

平成24年森彰英さん（26回生）から一游会会長職を引き継ぎ、約500名の会員の先頭に立って、精力的に活動してくれました。青木さんが特に腐心していたのは、先輩・後輩の心の絆を強固に繋ぐことでした。7～80歳代のメンバーが中心の「若年寄会」の集いにも積極的に参加してくれていました。今秋予定されている「一游会90周年記念懇親会」を大々的に開催すると張り切っていた矢先でした。

平成29年から「公益社団法人九段」に奉職し、尽性園と至大荘の運営・管理に携わってくれました。昨年事務局長に就任しその存在感は日に日に増して来ていました。特に至大荘に関しては、施設の充実に努め、往年の遊泳助手の経験を活かし、九段中等教育学校の至大荘行事の円滑な運営に心血を注いでいていました。法人九段の事務局長と

して彼ほどの適任者は他に見当たらず、貴重な人材を失い残念でなりません。

一游会会長、法人九段事務局長、菊友会理事としてこれから益々活躍が期待されていた矢先でしたので、そのいづれもが道半ばで終わったことに、青木さんご本人もさぞかし無念だったことでしょう。

5月26日の告別式出棺の折、いたいけな二人のお孫さんが、「おじいちゃん、ありがとう」と号泣していつまでも棺に寄り添っていた姿が目には焼き付いて離れません。ご家族の深い愛情に包まれていた一旦が偲ばれました。ご冥福を心からお祈りいたします。合掌。



青木君を惜しむ

高16回 渡辺 照正

至大荘、プール、尽性園、そして折々の集い
どこにいても君は私たちに安堵と希望を抱かせた
後輩を見やる君の目にはいつも慈愛が溢れていた

冠動脈バイパスの難手術を乗り越えて フェニックスのご
とく甦り

程なくして医師からは、「大いに泳ぎたまえ」というお墨付
きを得て、

ほころぶ君の笑顔とそれを伝える君の言葉には、エネルギー
ーが漲っていた

惜しむべし

君は忽然と旅立ってしまった

君を頼り、君を慕い、君とともに歩まんとする人々を置き去
りにして

願わくば君よ 天空を舞え 思う存分に舞え

藤岡和男（旧姓・太田） 37回生（高18回）

青木俊行君との出会いは清冽だった。

私は当時研究室に所属していて実験に精を出すべき学生だった。が、どうしても九段の水泳部のヘッドコーチをやりたいくて、前のHCの須貝（39回生）の後に入りこむ形で私（太田）が入った。その年に入部してきたのが45回生の子達だった。

青木君は小柄でやせていたけども、筋の通った感じのする青年だった。正直、選手としては余り期待のできない体格だった。筋力もさしてあるとは思えない。それで私の指導は徹底して流線型で抵抗の少ないバックを目指すというものだった。

当時始まった雑誌「とびうお」に掲載されていた「水泳の科学」の和訳、解説を見ながら、水泳の原理も説明し、体への感覚が判るように繰り返し練習させた。意欲的で真面目で感の良い彼はぐんぐんと伸びていった。

私自身がバックの事をよく知らなかったのも、彼が伸びると私も勉強して水の中の動きやストローク、水への感覚を考えた。テキストと彼の動きをいったり来たりして工夫したものだった。彼も私の話をよく聞いてくれた。下半身が沈まずによく伸び上がってキックし、体幹の保持は上手だ

った。

その年の合宿から、校外合宿ということになり、宿泊先、プールの選定から始めなくてはならなかった。下見もしないで、行ったのが会津の芦ノ牧温泉だった。合宿が終わり順調に伸びていたが、ついにその日が来た。十六校大会、小石川高校プールだ。

200m背泳に出場した彼は予選4位ぐらいで、決勝に進んだ。伸びのあるきれいな泳ぎだったが、100mの折り返しタイムを見て、アツと思った。1分21秒くらい、彼のベストタイムだと思った。しかもターンしてもスピードが落ちない。これでは、当時上田（38回生）が持っていた校内記録（2・48ぐらい）を破るのではないか！ その瞬間に総毛が立つ思いとなり、プールサイドへ駆け寄って、125mの折り返しでタオルをぐるぐる回して全力を出すようにコーチングした。（当時はまだサイドコーチは禁止ではなかった）彼はそれを一瞬見て、それから力を込めての泳ぎとなった。結果は1位の選手に肉薄する2位、校内新の大記録2・44だった。

九段の水泳部全体が躍動して喜んで祝福した。全体がボーッとする不思議な恍惚感が漂っていた。

あの時を、あの体験を、何より深く感じていたのは青木君自身だったろう。お通夜の席であの一六校100m B a 2

位の賞状が飾られていたのは、あの日の感激、興奮、幸福感を忘れたくないという彼の思いがずっとあって、あの賞状を大事に大切に保存していたのだと思った。

OBとしての青木君の活躍、活動は素晴らしく、目覚ましいものだった。謙虚に全体を見て後輩を思いやる姿勢を感じなかった人はいないと思う。亭長をやったときには豪放な面を見せてくれた。そして一游会会長として、様々な工夫をして、組織だてて、立派に立て直してくれた。有り難う、青木君。

同期の佐藤君が、「青木はつよいから」と言っていたのを思い出す。頑張りが過ぎて、それを厭わない心。後輩のため、現役生の為を思う彼の強い気持ち、その原点はあの時の一六校にあったのだと思う。

2019・6・23



青木俊行会長を偲ぶ

菊友会理事長 原田忠禮（40回生）

5月20日の朝に青木会長の訃報が届き、一瞬頭の中が混乱し理解ができない状態でした。と言うのも5月18日（土）の菊友会の評議員会を体調不良で欠席された当日の夕方、ご本人からメールで、

『金曜日の夜体調を崩し自宅近くの緊急病院に行って検査の結果脳梗塞と診断され二週間くらい入院する事になりました。』という連絡を受けました。それほど重篤ではないのだなと思い、しっかり養生してくださいとの返信をした矢先でした。誰よりも九段を思い、至大莊を愛していた青木会長。菊友会の行事でも理事になる前から積極的に参加し、席上得意のウクレレを披露した至大莊懇親会はもとより、菊友会大会、東京校歌祭、菊友ゴルフ大会と常連となってくれました。2015年度に菊友会理事となった後、法人九段の職務に専念するということで、一時理事を退きましたが、今年度再登板をしていただき、頼もしい後輩に大きな期待を寄せ、一游会・法人九段と菊友会の連携も安心できると思っていた矢先です。

一游会会長として一時期低迷していた一游会を蘇らせた

手腕にも敬服いたしました。その裏には、身を粉にして、至大莊遊泳助手の指導に尽力し、自らも助手として参画するなど、大変な苦勞・努力をされていたことでしょう。至大莊をこよなく愛した姿が忘れられません。

一方、法人九段事務局長として施設の快適化を推進し、生徒は勿論、助手の環境改善にも注力し、今年は観海亭にエアコンを設置してくれました。苦勞をいとわず、泣き言も言わず、何事にも前向きに取り組む青木会長の姿勢は、一游会だけでなく、九段魂として脈々と流れる伝統の1ページを飾ることと思います。

それだけに青木会長に甘えてお願い事ばかりをしてきた事柄がご負担になっていたのではないかと、悔やまれてなりません。

現役時代に背泳の校内新記録を何度も塗り替え、試合で800メートルを背泳で泳ぎ切る根性もさることながら、だからにも慕われ、頼りにされ、力強く行動してくれた青木会長に感謝の意を込めて、合掌。ありがとうございました。

青木俊行君のエピソード

高木昭美（高校24回）
あきよし

このたびの青木俊行君の急逝は本当に惜しまれる。本稿では、一游会のつきあいのまま、「青木」と書かせてもらい、いくつかのエピソードを紹介させてもらいたいと思う。

1971年（昭和46年）4月、青木は、入部してきた。私は3年生、当時の水泳部の成績は、あまりふるわなかったが、その中で青木は1年生のときからエースとして活躍した。

対抗戦のとき、800mなどの長距離に出せる選手が一人もいなかった。そこで苦肉の策として、ヘッドコーチが、青木に、800mに出てくれないか、と頼んだ。青木は、あっさり了解し平然として800mを泳いだ。このとき、初めの100mはクロール、途中の600mが背泳ぎ、ラスト100mがまたクロール。前代未聞の泳ぎ方だったが、相手校の自由形の選手とまっこうから争うタフな泳ぎはいまだに忘れられない。

背泳では、スタートの前に必ず入水するが、垂直に入水する泳者がほとんどである。しかし、青木の場合は、ちょうど鉄棒の「踏み越し降り」のように両脚をそろえて体を一瞬横

にして勢いよく入水する。こういう目立つやり方は、遅い選手がやるとみっともないわけであるが、青木は、十六校では優勝を争う選手だったので、ユニークな入水のしかたが、猛烈にカッコ良かった。遠くから見ても、あ、青木が入水した、とすぐわかった。このパフォーマンスで青木にあらわれた後輩もいたに違いない。

現役時代の青木は、水泳部の部員の統率力にも優れたものがあつた。練習の後、校舎の半地下の玄関前でミーティングを行うのだが、青木が進行役をつとめたときは、その日の達成状況、連絡事項など手際よくまとめるのが実にうまかつた。

学生時代には私も至大荘で青木と一緒に遊泳指導にあたつたが、身体頑健で低水温に強いにもかかわらず生徒には無理な泳ぎをさせず心やさしい指導をしていたと思う。遊泳指導では、C班の指導がいちばんむずかしい。泳力がまちまちで、天候がよければ遠泳に連れて行ってもいいような生徒がいる反面、「沖船」がふさわしい生徒もいる。あるとき、C班の各班がそれぞれに隊列を組んで沖まで泳いでゆき、脚が立たない状態で、旋回や立ち泳ぎの指導をしたことがあつた。折りしも天気が急に崩れて空から雨がぱらつき、嫌な三角波が出てきた。そのため急にパニックになる生徒が出てしまい、先生や助手は救助や指導に大忙しになつ

た。私が担当したC班から何人かパニックになった生徒が出てしまい生徒を背負って泳いだりしてかなり大変だった。ところが、青木が担当した班の生徒たちだけは、一人もパニックに陥る生徒が出なかった。あとで青木に、どうしてそんなにうまくできたのか、聞いてみた。「いや、僕の顔を見てずっと見ていな、だいじょうぶだから、といってただけです。」と平然としていたが、実に不思議だった。高校1年生は、まだメンタルの弱い子も多い。身体が成長していて泳力に問題なさそうな生徒でも、「あ、だめだ」、と思ったとたんに泳ぎが突然みだれることがある。体軀堂々たる青木の顔を見ていた生徒たちは、安心感からか、パニックに陥ることもなく最後まで泳げたのだろう。私も学生時代4年間、前期後期あわせて8期やったが、こういうことがあったのは後にも先にも青木だけだった。

やがて青木も私も就職し、私の方は、至大荘、一游会から離れた生活を長く送ってしまった。

一游会に私がまた関わるようになったのは、青木が一游会会長になったことを知った後である。青木が会長をやってくれるならなにか少し応援をしてやりたい、というような気持ちからだった。会長になった青木は、「私はなんにもやってません。」が口癖だったが、現役のためのスポーツタイマーの寄付など今までやっていなかった支援策を積極的に

実施した。青木につられて私も一游会総会やOB戦にまた出るようになった。至大荘懇親会では、観海亭で、かつての助手のときと同じように一緒に酒を飲んだりしたのは実に楽しかった。



日本水泳連盟の審判の仕事をやりたいと私が思い立ち、中太昌子先輩（高校16回）の紹介で資格取得講習を申請したときは、一游会会長名で青木に推薦状を書いてもらった。青木の面倒見の良さには、いまだに感謝している。

十六校では、800mリレーのときに、九段水泳部現役男子3年生が水禪をしめて応援するのが伝統になっている。ところが2015年の十六校のときに、九段の水禪の伝統などをまったく知らない大会役員から現役が嚴重注意を受けたことがあった。たまたま現場に居合わせた私は、後で青木に報告したところ、青木は、十六校主催者に文書で申し入れを行った。おかげで翌年も水禪による応援が認められるようになり、母校の水泳部の伝統が守られることになった。もし青木が申し入れをしなかったら、40近く続いていた水禪による応援の伝統は途絶えてしまったかもしれない。

一游会でも就職して一游会から離れるとあまり水泳に関わらなくなる人も多いが、青木の場合は、大企業のサラリーマン人生のほか、一游会、菊友会、法人九段などの各関係で活動し続けていたのには、頭が下がる思いがする。青木の葬式のととき、職場以外の各関係団体からの供花がずらりと並んでいて、青木の各分野での活躍、貢献ぶりを表していた。

このように青木のエピソードを紹介してみると、とてもいい人生だったとは思われるが、やはり早すぎる。一游会

にとっても大きな人材を失くしてしまったことが本当に惜しまれてならない。

合掌

